

# 1 自己評価及び外部評価結果

(ユニット名)

事業所番号	0670800465		
法人名	医療法人 宏友会		
事業所名	認知症対応型グループホーム「ほなみ」		
所在地	山形県酒田市本楯字前田127-2		
自己評価作成日	令和 元 年 8 月 6 日	開設年月日	平成 12年 4 月 1 日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

- ・利用者の主体的な生活やその支援を考え、毎日を充実したものにする
- ・地域の方々と交流し社会との繋がりを継続できる
- ・当事業所の認知症介護経験を地域還元する機会を作る

理念をもとに年度方針を掲げている。利用者各々の気持ちや状態に合わせたケアを大切にしている

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、法人の高齢者医療介護エリアの中に19年前に設置され、自然環境にも恵まれ、安定した生活支援を実践している。特に、朝の会で利用者の一日の過ごし方を確認し、利用者がしたいことを出来るだけ自分の力で行い、充実した生活を継続的に送れるように支援している。また、地域の方々の事業所への理解も進み、ボランティアの来所やコミセン行事への参加など、「出来るだけ多く地域の方々と交流して生活できるように」なってきた。そして、地域の方々に、認知症関係事業所としての経験と知識を還元できるように、「民生委員定例会」で認知症のかかわり方について学ぶ機会に支援をしたりしている。これらは、事業所が特に配慮してきた家族との密接な関係づくりが基盤となって実現されていると思われる。

※事業所の基本情報は、公表センターページで検索し、閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 <http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/>

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	協同組合オール・イン・ワン		
所在地	山形市検町四丁目3-10		
訪問調査日	令和 1年 8月 26日	評価結果決定日	令和 1年 9月 19日

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
55	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	62	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
56	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,37)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	63	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
57	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	64	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
58	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:35,36)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:48)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:29,30)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
51	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

山形県地域密着型サービス「1 自己評価及び外部評価(結果)」

※複数ユニットがある場合、外部評価結果は1ユニット目の評価結果票にのみ記載します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践  地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年度初めに理念の再確認を行い、事業所の年度方針にも具体的に盛り込み、実践に繋げている。業務日誌の最初のページや事務所など目につく場所に掲示され、全職員は内容を把握している。	年度当初に皆で理念を確認して「年度方針」を策定し、家族にも説明している。今年度は「自由な生活」「社会とのつながりの継続」「地域に還元する」という項目で具体策を定め、職員も共有し実践している。朝の会を通して一日の過ごし方の聴取や利用者の地域行事への参加、小学校登校の見守り等で「自由な生活」と「社会との繋がり」を大切にするとともに、事業所のノウハウを活かした地域貢献にも力を入れている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい  利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	自治会の活動には参加はしていない。事業所の活動として小学生の登校を見守る、見守り隊・保育園への掃除ボランティア・地域の方を招いておやつ作り・小学校への雑巾寄付・コミセンの行事への参加など日常的に地域との交流する機会がある	事業所は地域に溶け込んでいる。小中学校の登校見守り隊の一員としての参加、保育園の掃除ボランティアとしての訪問、利用者作成雑巾の小学校に提供訪問、コミセン主催歌声喫茶へ参加、公民館の祭りでの「ほなみポテト」の販売、地域の勉強会での講師引き受け等、日常的な交流が実施されている。事業所でのノウハウを活かし、「利用者の思いやその対応」を記載した広報誌を配布したり、地区民生委員の定例会に参加して認知症介護への理解と啓蒙を行ったり、地域貢献に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献  事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2カ月毎に広報誌「ほがらか」を近隣地域に配布している。地区民生委員の定例会議に出席し認知症の方へのかかわり方を説明したり、認知症になっても地域で安心して暮らせることの理解に繋げている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み  運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回、利用者の生活や、地域活動の取り組みについて説明し、避難訓練・感染症対策等その都度実施している事業をテーマに会議を実施・報告している。会議において出された意見は事業に活かしている。	市職員・振興会会長・同婦人部長・民生委員・包括の職員、利用者、理事長・職員の出席で2月に1回開催し、生活状況を報告の上、意見・情報を交換している。外へ出たがる利用者への対応方法(パリケードについて)などのテーマで事業所からの報告し、委員の方から意見等頂いている。また、避難訓練の地震対策等について、率直で具体的な意見交換を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の職員から運営推進会議において報告、指導があり、施策について法人として情報共有を受けたり、意見交換を行っている。	市職員から運営推進会議に出席してもらうとともに、市主催関連会議に参加し、折々に情報と意見交換を行っている。また、毎月市の介護相談の訪問が有り、利用者からお話を聞いてもらっている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、環境や利用者の状態を考慮しながら、玄関に鍵をかけない工夫や、身体拘束をしないで過ごせるような工夫に取り組んでいる	管理者及び全職員は、身体拘束について法人の全体会議で勉強会を行い、その弊害についての理解を深めている。実践のため、職員間で話し合い、利用者の認知症状やその行動を御家族への説明し、利用者が身体拘束をなるべく行わないで自由かつ安全に過ごせる環境づくりを考えている。	身体拘束に係る指針を基に法人主催の研修会で学び合うとともに、「身体拘束委員会」個別対応について検討し合っている。認知症による症状や行動を職員間で話し合うとともに家族へも説明し不適切な対応の無いよう取り組んでいる。所内では、必要が生じた場合に、例えば 帰宅願望のある方へ対応などについて、マニュアルを踏まえて検討し、対応している。職員は禁止の対象となる具体的な行為や拘束による弊害をよく理解している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者及び全職員は、虐待について法人の全体会議で勉強会を行い、その弊害についての理解を深めている。また、その都度、日常ケアを振り返り、職員各々がこうした支援は虐待に当たらないかという事を話し合い、虐待を行わないように支援を見直している。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者及び全職員は、権利擁護について法人の全体会議で勉強会を行い、その理解を深めている。現在、制度を利用している入居者はいない。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者や担当職員は、契約書・重要事項説明書に沿って十分な説明を行い、不安や疑問がないか尋ねて、納得を得た上で同意を得るようにしている。また、今年度新たに、生活機能向上連携加算や栄養スクリーニング加算の介護報酬の加算の必要性について説明を行い、同意を得ている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	<p>○運営に関する利用者、家族等意見の反映</p> <p>利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている</p>	<p>利用者の不安や意見等は、日常的な関わりの中で汲み取るように努めている。毎月、家族の日を開催し、関係性を深め、御家族の意見や要望を伺っている。</p>	<p>利用者については日常会話の中から汲み取ることに努力している。市の介護相談員が来訪し利用者が直接外部者へ意見を表せる機会となっている。家族については、毎月「家族の日」を開催し、意見等を表しやすい環境を作っている。職員も面会のたびにどんな生活を送っているか、いいことも悪いことも報告することで信頼関係の構築に努めている。</p>	
11		<p>○運営に関する職員意見の反映</p> <p>代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている</p>	<p>管理者は、日頃から職員の意見や提案を聞き、必要があれば代表者に報告している。</p>		
12		<p>○就業環境の整備</p> <p>代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている</p>	<p>年1回業績評価を実施している。代表者は、業績評価を基に、職員の日頃の努力や具体的な実績、勤務状況等を把握した上でフィードバックを行い、仕事が継続でき、向上心を持って働けるように職場環境を整えている。</p>		
13	(7)	<p>○職員を育てる取組み</p> <p>代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている</p>	<p>全職員が毎月行われている法人内の研修に参加する機会があり、職員の希望・経験等に合わせた県グループホーム連絡協議会が主催する研修に参加している。管理者を中心に経験のある職員が新人に対しその都度指導を行っている。</p>	<p>職員が、採用時から、体系的に研修に参加する機会を得られるように図っている。そして、毎月同一敷地内で開催される法人主催の「拘束」「感染症」等に係る研修会に参加させるとともに、日々の業務の中で先輩等が指導し、気付きを促している。年1回業績評価を行い、職員個々の努力やケアの実際や力量を把握し指導することで、職員のスキル向上に繋げている。</p>	
14	(8)	<p>○同業者との交流を通じた向上</p> <p>代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている</p>	<p>県グループホーム連絡協議会に加入し、交換実習の受け入れや研修等に参加して、情報交換する機会を持ち、他事業所の良い所や支援方法を参考にし、ケアに取り入れている。</p>	<p>職員を、市主催の連絡会議や県グループホーム連絡協議会の研修に積極的に派遣しながら、人的なネットワークを拡げ、サービス向上に活かしている。後者の運営に関しては、事業所は、中心的な役割も担っている。</p>	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用開始時には、特に生活する上での要望や不安を本人に伺ったり、その言動を観察し、要望を叶え、不安を軽減できるように情報を職員全員で情報共有しケアを実践し、安心と信頼関係の構築に努めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用開始時には利用者が当事業所でどんな生活を送ることができるか御家族の不安や求めていることに対してどのような対応ができるか話し合いの機会がある。面会の度に利用者がどんな生活を送っているかどんなことでも伝えるようにすることで、事業所や職員への信頼関係の構築に努めている			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	昨年度は2名の利用開始があった。御家族や在宅・施設の入所情報や生活の様子を見ながら当時業者による支援が適切であると判断し、支援が継続している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者各々が主体的に生活できるように、普段の会話や家事・余暇活動において共に生活を楽しめるように「一緒に行く」を意識しながら、関わりや支援を心掛けている。			
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、御家族の面会時に利用者の日常の様子や家族を愛おしく思う気持ち面会の度に伝え、御家族の存在感の大きいことを理解して頂くよう情報提供に努めている。家族の日にて、一緒に過ごし、外出が定期的に確保され、実施されている。			
20		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	当事業所に利用してから地域の方との関係が顔なじみになっており、交流ができる機会を積極的に作っている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員は利用者同士を関わり合えるように仲の良い利用者同士が関わられるように環境作ったり、話を振ったり、関わり合いが見られ際は職員はあえてその会話に入らずその関係性を尊重し、見守る支援を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所された方々は、殆どが隣接する介護老人保健施設に入所されている。職員からその利用者の情報を得る事はあるが、積極的に関わることはない。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員は日常の利用者との会話の中から、本人の思いや希望・意向を汲み取るようにしている。思いの表現が難しい利用者は今までの取り組みを参考にしたり、職員だけでの対応が難しい希望に対しては、御家族に相談・協力を得たり、安易に諦めず出来る範囲で対応している。	前回の目標達成計画を踏まえ、センター方式を活用し、これまでの暮らしの歴史や現在の生活での好み・得意なこと・不快なこと・出来ること等について、家族の協力を得て詳細な把握が行われている。職員も、認識の向上を意識しながら、本人本位の検討に活かそうとしている。また、朝の会で、一人ひとりに一日の過ごし方の希望を確認している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	職員は日常の利用者との会話の中や、家族やこれまで関わりがあった方からの情報を聞き取りそれを、センター方式に記載しまとめ、把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は利用者各々の生活パターンを把握するうえで、過ごし方や好み、得意なこと、快や不快なこと、出来ることを常に意識して観察し、気づいたことを記録し、それを職員間で共有して、日常生活で活かせるよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成者と職員は日頃の観察に基づいて、アセスメント・カンファレンス等を行い、家族の意向を取り入れながら介護計画を3ヶ月ごとに見直しを行い、変化に応じて作成している。また、必要に応じて隣接する介護老人保健施設のリハビリ職員と協力し生活機能向上連携加算介護計画を作成・実施している。	10日ごとにサービスの実践状況の確認とその評価を行い、3か月毎にモニタリングとカンファレンスを行い、状況に応じ又は6か月毎に計画を見直している。家族の意見を踏まえ、職員皆の考えを活かしながら、利用者の出来ることを大切に、現状に応じた計画の作成を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員は日常の中で気づいたことを記録、その都度アセスメントする項目を日誌に付箋し、情報共有を図っている。また定期でカンファレンスを行い、その情報に基づいて介護計画の見直しに活かしている。		
28		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	週に1回～2回程度、地域のスーパーや移動販売に食材や日用品を利用者と買い物をする機会がある。また、コミセンや地域の団体が主催する行事に参し、利用者の楽しみとなっている。		
29	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、かかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	4週間に一度、主治医は利用者に対し定期的な訪問診療があり、健康状態が把握されている。必要に応じて主治医が指示した適切な医療機関を受診する場合はご家族に連絡し、早急に受診できるような体制にある。	全員が近くの診療所を希望しており、定期的には又は臨時的に職員の付添で診療を受けている。診療所のない診療科については家族の付き添いで受診している。隣接の保健施設の看護師が事業所の看護師に併任しており、記録も詳しく、医療福祉の連携が密接である。	
30		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携体制に基づき、隣接の介護老人保健施設の看護師が併任し、24時間対応できる体制になっている。常に利用者の健康管理や医療面での相談・助言・対応が出来ている。急変・事故対応マニュアルを作成し、すぐに主治医・看護師に連絡するよう徹底している。		
31		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、入院治療が必要な可能性が生じた場合は、協力医療機関を含めた病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には頻繁に職員が見舞いに行き、安心して頂けるように配慮することをマニュアルとしている。その時の情報を記録に残し情報共有している。また、本人の心身の状態については御家族と連絡を密に行うよう努め、医療機関には、入居者が落ちついて過ごせるような関わり方などの情報を提供し連携を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
32	(12)	<p>○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援</p> <p>重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、医療関係者等と共にチームで支援に取り組んでいる</p>	<p>事業所の方針を利用開始時に説明するとともに、看取り、医療行為、歩行困難、嚥下障害等の状態の変化に合わせて、主治医・本人・家族・職員で話し合いの場を設けている。また終末期に関する医療行為について家族の日でご家族と話し合っている。2年前に2名の看取りを行った。</p>	<p>重度化や看取りについては、利用開始時に、事業所の方針を本人・家族に詳しく説明するとともに、機会あるごとに主治医・本人・家族・職員で話し合いの場を設け、利用者本位で対応している。その知識ノウハウについては、折々に職員間で研修しており、過去に看取りの経験もある。</p>		
33		<p>○急変や事故発生時の備え</p> <p>利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている</p>	<p>症状に合わせた対応のマニュアルに沿った勉強会を実施し、適切な行動がとれるよう訓練している。夜間や外出時の急変時のマニュアルを作成し、その際は主治医の指示をもらう体制になっている。</p>			
34	(13)	<p>○災害対策</p> <p>火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている</p>	<p>災害避難マニュアルを作成し、必要があれば独自で避難訓練を計画し、職員全員が避難誘導を身に付けている。年2回消防署、地域の消防団の指導を頂いている。さらに災害の発生時に備えて毛布を人数分準備している。長距離の避難誘導に備え災害時用の車いすの検討を行っている</p>	<p>年2回消防署や消防団の支援を得て火災訓練を行い、実際に避難してみて、具体的な課題を把握し検討している。また、敷地全体で協力して地震等の避難訓練を行っている。運営推進会議で地震等への対策に意見等を頂き、現在検討している。敷地全体で毛布や食料品を備蓄している。災害用の車いすの検討も行っている。</p>		
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>						
35	(14)	<p>○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保</p> <p>一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている</p>	<p>事業所内においてプライバシーの確保について職員間で確認したり、利用者が集まった際や、入浴・排泄時などその都度、利用者にもプライバシーが保護されているか聞き取りを行っている。接遇について自身の接遇を振り返る機会があり、その都度利用者との関わり方や声のかけ方など職員間で相談し合っている。</p>	<p>プライバシーについては全員で気を付けている。実際に利用者から訊いてみたりしながら、職員間で注意しあったり、暖簾やカーテンを整備したりしている。特に、入浴排泄などではその都度注意し合っている。また、自己評価において自分の接遇を振り返る機会も設けている。</p>		
36		<p>○利用者の希望の表出や自己決定の支援</p> <p>日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている</p>	<p>活動の前には、必ず意思確認を行っている。理解が難しい方には分かりやすく簡単な言葉や選択肢を絞ったり、その人に合わせた声掛けを行っている。</p>			



自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
37		○日々のその人らしい暮らし  職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員は朝の会で一日の過ごし方を一人ひとりに聞くようにし、事業所の予定も説明して参加の有無を確認している。業務優先でなく利用者の「～したい」を大切に考えることを意識して柔軟に対応している。積極的な意見はあまりないが、個人的に聞くなど意見を聞き出す様に配慮している。			
38		○身だしなみやおしゃれの支援  その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	可能な限り、衣服をその人の好みに合わせて選択できるような環境を整え促している。皆が集まった時は、おしゃれや身だしなみ衣服で褒めあったり楽しめる話題につなげている。			
39	(15)	○食事を楽しむことのできる支援  食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事作りに関わる作業工程を利用者と一緒に行い、メニューの決定や食材の味付けを選択し、できる力を発揮する事で楽しみとなるように支援している。また、嫌いな食材や食事がすすまない際は本人の好きな物を提供するように対応している。	朝・夕は栄養士が準備した食材を基に、3食とも職員と利用者が協力して調理したものを楽しんでいる。利用者も、野菜の切り方や味付け・配膳・片付けなどで役割を担っている。誕生日メニューや地域の方を招いたお菓子作り、家族の協力を得た外食など、食事を楽しめるような支援に努めている。一人ひとりが食べやすい状態での提供なども配慮している。		
40		○栄養摂取や水分確保の支援  食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	昼食・夕食は管理栄養士が準備した食材により栄養バランスが確保されている。その人の嚥下機能に合わせて食事形態をミキサーにしている利用者がある。食事・水分量は毎日チェックし、毎月体重測定を実施し、増加・減少の管理をし主治医に報告している。			
41		○口腔内の清潔保持  口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔衛生管理体制加算により歯科医師、口腔衛生士の指導を月に一度受けている。日常の口腔ケアとして食後の歯磨き、義歯洗浄、うがいの徹底を行っている。又、磨き残しのある方は職員が仕上げの介助を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
42	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄チェック表を用い、各々の排泄パターンを把握している。個別の排泄プランにより声掛けや誘導を行うことで、パット外しや失禁、放尿・放便が改善されトイレでの排泄が維持されている。また、トイレでの排泄は難しいがトイレを使用し、排泄行為を維持されている方がいる。	排泄チェック表を用い、一人ひとりの時間・便の状態などを詳しく記録されており、アセスメントを行いそれを基に各々のパターンを把握し、支援のあり方を話し合っている。適切な声掛けや誘導によって、出来るだけトイレで、座っての排泄を目指している。パットの減少などの効果も見られ、維持継続が図られている。		
43		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	自然排便を促すよう、毎日運動を生活の中に取り入れ、水分摂取をすすめたり、水分摂取量を管理し排便が習慣化するように取り組んでいる。便秘がちの入居者については起床時に冷水を提供している。			
44	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、事業所の都合だけで曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	概ね2日に1回程度、夕方に入浴介助を実施している入浴中は職員の介助のもと特に安全を配慮し、歌を歌ったり、寛いだ気分で入浴を楽しんでいる。身体機能の悪化により浴槽に入れない利用者に対してはシャワーチェアを使用し、足を桶に入れながら温まられるように配慮している。	高齢化し消極的になる傾向があり、一人ひとりの話題を考えたり、歌を歌ったり、出来るだけ入浴が楽しくなるよう配慮して支援している。2日に1回程度を目標にしている。身体状況に応じて足を温めながらシャワーチェアを活用し、清潔が確保できるよう支援している。		
45		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間や日中の休息時間は、本人の意思・体調に合わせて支援をしている。居室にソファを置いて静かに過ごす時間を作ったり、それまで習慣としていた読書の時間を設けたり、夜間寝付けない場合はゆっくりと話を聞いたり、お茶を飲んだりして安眠できるような関わりを行っている。			
46		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者各々が服薬に関する理解は難しいが、処方箋をファイルに綴じ、職員がすぐに見られる場所に保管している。特に服薬内容が変更になった場合は状態に変化がないか観察記録を行い、主治医に報告をしている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
47		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者は、日常的に家事行為(調理・洗濯物干し、掃除・裁縫)等の役割を行う事で力を発揮されている。活動の際は各々が楽しめるよう環境を整えたり、配慮行っている。家事行為の延長が保育園ボランティアや小学校への雑巾の寄付の活動につながっており、楽しみとなっている。			
48	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	朝の会で天気や気温を考慮しながら、各々にその日の希望を聞き、職員が対応可能な限り外出に付き添っているが、その際の入居者からの積極的な希望は少ない。御家族の協力を得て希望する外食や観光などに出かける機会を設けている。また身体的な状態で体調の不安から日常的な外出行為が難しい方もいる	高齢化の中でも、出来るだけ外気に触れ、心地よい刺激を受けられるように支援している。毎朝、朝の会で一人ひとりの希望や天気を考えながら、外出するように図っている。敷地内散歩や小学生の「見守り」、ジャガイモの水かけ、テラスでの花見やお茶など、また、家族の協力を得て、帰宅や外食・観光なども支援している。		
49		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	御家族からお金を預かり、事務所で管理し、希望に合わせて買い物を行っている。支払いが可能な方は買い物の際に支援している。現在金銭を個人管理している利用者はいない、個人管理できるかどうかの試行も行っていない。			
50		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人より家族への電話の要望があったり、御家族から小包が届いた際は電話が出来るよう支援している。年賀状は毎年入居者が書き、字を書くことが困難な方に対しては本人の言葉を代筆して色を塗ってもらったり工夫しながら作成している。			
51	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	皆が集うホールには季節感が感じられるように花や季節の飾り物を季節ごとに飾り付けしている。その脇の台所からは家事の音、調理の匂いによって生活感が感じられる。またトイレの扉の閉め忘れによる不快の訴えや、TVの音が不快に感じることがあるため、時間帯や番組を考慮し使用している。	天窓から柔らかい光が入る広くて静かな居間には、テーブルとソファが置かれている。南面の窓からは桜木のコもれび差し込み、壁面は過去の楽しい写真が貼られ、ちぎり絵や書や押し花などが飾られ、季節感が感じられる。利用者はそこで、野菜を切ったり、洗濯物を畳んだり、テーブルで寛いだり、ゆっくりと、思い思いの時間を過ごしている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
52		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり  共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールの所々にソファが設置され、2、3人で談笑されたり、独りになったり、思い思いに過ごされている。気の合う方同士を近い席にすることで会話が弾んでいる。			
53	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮  居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が慣れ親しんだ布団を持ち込み使用したり、家族との思い出の写真を飾っている。馴染みの物が無い場合は、当ホームで生活していく中で作成したものや写真を飾ることで自分の居場所と認識できている。また個々の状態に合わせた居室の配置を考え、環境を整えている。	居室は一人ひとりの個性で設えられている。慣れ親しんだ布団や家具を持ち込んだり、娘と孫と写した写真を飾ったり、色紙、昔からの装飾品を飾ったりしている。清掃にも配慮されている。		
54		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり  建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者が移動するホール内の導線を、さりげなく手すりやテーブル、ソファ等に手がかけられるようにして、安全に移動しやすいよう工夫している。			